

キミへ 続くステップ【体験版】

本編より一部を抜粋して掲載しています。
作品の雰囲気をお楽しみいただければ幸いです。

プロローグ

柔らかなライトが舞台を包み、微細なきらめきを演出していた。
その金色に輝く光の粒が、揺れる髪を縁取り、指先の軌跡を柔らかく照らす。

軽やかなステップが床板をかすかに叩く。
靴音が描くリズムが、静かに心臓の鼓動に重なった。

ふと彼の視線がこちらを射抜く。
瞬間、胸の奥が鋭く脈打つ。

それが蒼との初めての出会い。
なぜか視線が外せなくなっていた。

知らなかった。
その眼差しが、僕のすべてだということを。

——この物語は、
ひとつの“偶然”が導いた、僕と蒼の記憶。

ふたりだけの時間、ふたりだけの場所。
それがどれほど儚くて、どれほど鮮やかだったか。

どうか、見届けてほしい。
あの景色は今も胸の奥でひそやかに息づいている。

第1章

「湊君、悪いな。休みの日に呼び出して」

「いえ、今日は何の予定もなかったのです。新しいダンサーが入ったんですね？」

「ああ、高嶺蒼くんね。君と同じ日本人だよ。まだ未成年だから酒の管理、頼むよ」

「はい、わかりました」

一瞬、視線が交差した。



綺麗な人だな。

初めて蒼を見た時、そう思った。

* * *

氷の割れる音、透明にきらめくグラス。

蒼も片言ではあるが言葉も覚え、少しずつ店にも馴染んできていた。

僕たちは職種も違い、話す機会もあまりなかったが、僕から見える蒼は……

毎夜、美しい舞姿で魅せてくれる、鋭い感性を備えた天才肌のダンサー。

だけど、人見知りで不器用な、どこか危なっかしい存在でもあった。

——ここは会員制クラブ『ルクス』

オーナーが自分のこだわりだけで開いているような店。

店内に一歩足を踏み入れると、70年代のバラードが心地よく流れ、常連客ばかりが静かにグラスを傾けている。

SNSお断り。若い客も女性客も見かけない。謎の掟が存在する誰も知らない静かで上質な場所——。

僕はこの雰囲気が好きで、三年間ここで働き続けている。

* * *

ある日の夜

店内の喧騒のなか、せわしなく動き回る僕に、派手なスーツの中年男が熱のこもった視線を送ってくる。

そんな様子に気づいたバイト仲間のカイが、耳元でそっと囁く。

「グレインさん、またお前のこと見てるぞ。どうするの？」

「どうするって、どうもしないよ。そういう仕事じゃないし」

「一回ぐらい付き合ってみれば？あの人、金持ってるよ。それにヴァンレオナルドとも裏で繋がってるみたいだし」

「知ってるけど、結構聞くよな悪い噂。ていうか、そもそも無理」

「そうなの？まあ悪い噂もあるけど大丈夫だろ？お前なら。
俺ならいっちゃうな、チャンス転がってそうだし、あの界限」

グレインは、人の良さそうな笑みを向ける。だが目の奥に、ねっとりとした“何か”が沈んでいる。

本能的に不穏なものを感じ、距離を置いていた。

何考えてるかわかんないところ、あるんだよな。

そんな気持ちを知ってか知らずか、グレインは細い目の奥から、舐めるような視線を送ってきていた。

みんなあの優しげな笑顔に騙されてるけど、何となくわかる……それだけじゃないって。

それにしても、僕のどこがいいんだろう？

心に疑問符を付けたまま、軽く愛想笑いを返した。少しだけ顔がこわばるのは仕方ない。

カイの言葉を思い返す。

僕がグレインさんと付き合う？ありえない。
思わず苦笑してしまった。

そんな“ありえないこと”が近い未来に現実になるなんて、想像すらできなかった。

2人で雑木林の中に入っていく。

「おかしいね、見つからない。こんな事ってある？」

更に奥に入っていくと……「ここって何？」

桜の木に囲まれた公園。

古びたバスケットゴール。誰もいないベンチ。

開けた空間の中心に、バスケットボールが一つぽつんと置かれている。

「あった！僕の帽子」

それはゴールの後ろの大木に引っかかっていた。

「よかったな」……こんなところまで飛んでくるはずないけどな。

蒼が不思議そうに言った。

「ここに来たら、急に爽やかな風が吹き出したね。気のせいかな？」

「いや、何かが狂ってる気がする。さっきからGPSが効かないし、時間の感覚もおかしい。

この季節に桜が咲きそうって、どうなってるの？」

街路灯に映し出された木々は皆、小さな蕾をたわわにつけ、その開花を待ち望むかのようにそよ風に揺れていた。

2人はしばらく、啞然としてその空間を見つめていた。

蒼は……「いい場所見つけたね。そうだ、踊ろう」
ダンスの練習を始めた。

僕は周辺の調査を始めたけど、スマホの地図は何も示さない。何の情報も出てこないなんて？
だけど収穫はあったよ——なんと蒼の家と、僕の家への近道を見つけたんだ。

「何か分かった？」

「分かったよ、ここは『時空公園』」

「時空公園？」

「うん。今、僕が名付けた。時空の歪みがあるな、ここには」

「大丈夫なの、僕たち消えちゃったりしないよね？」

「どうかな、長くいたら……」

「もうそろそろ帰らない？」

蒼が帽子をかぶり、帰り支度を始めた。

こんなに簡単に信じるか？

笑いをこらえながら、

「ごめん、適当なこと言っちゃった。時空の歪みなんて知らないよ、経済学部だし」

「からかったの？ひどいな」

「ちょっと震えてたね」

蒼が不服そうに口を尖らせた。

「そんなわけないでしょ。時空の歪みなんてちっとも怖くないよ」

クスッと笑って――「見てて」

そのままゴールに走り込んでシュートを決める。

「蒼もやっごらん」

蒼もゴールに向かって「シュート！……あれっ？」

高く跳ね上がったボールが蒼の頭を直撃し、フラフラとその場に倒れた。

「蒼、大丈夫!？」

駆け寄って顔を覗き込んだ。

蒼、そんな大人の顔、僕には一度も見せたことなかったよね？

斜め前のソファに腰を下ろし、鋭い視線を投げかけた。

どうする？僕はここにいるよ。

僕の隣には、いつしか長い髪の妖艶な女性がしなだれかかり、耳元で何かを囁いていた。

僕はその時、不思議とその存在に気づくことができなかった。

蒼がふいに顔を向けた。

同時に隣の女性が僕にグラスを差し出した。

「どうぞ、召し上がれ」

どこか遠くから響くような囁き声に、ふと視線をそらした。

薄い光が二人を裂いた。視線はもう戻らない。

——この人はいつからここに？

「あなたの苦しみを取り除いてあげる」

透かし彫りのクリスタルグラスの中で、琥珀色の液体が妖しく艶めいていた。

「ダークラム151。強いわよ。飲みたくなければ飲まなくてもいいの」

何なんだこの人は。邪魔しないでほしい。

だけど……挑発するような微笑みと、蒼の視線。

——よし、飲んでやる。

僕はグラスを受け取った。

薄い液面がランプの光を細く裂いた。

一口で胸の奥が燃えるように熱くなる——意識は冴えているのに……

薄暗いホールの底に流れる甘やかな音色が、しつとりと耳に響く。

艶やかに濡れそぼる唇が目の前に浮かび上がった。

「その隠された欲情、抑えきれないんでしょ？全部、私にぶつけて」

気付けば僕の方からその艶やかさを求めていた。

熱と香りに包まれ、境界がほどけていく。

背中の傷にそっと触れる。だけど何も言えない。
ずっと一緒にはいられない、その思いが心を縛っていた。

蒼の瞳に光が揺れて、美しく切ない心を伝えた。

「他のことは考えなくていいよ。今のことだけ考えて」

蒼の小さな囁きが胸の奥に深く響く。
神聖な儀式のように丁寧に互いの身体を清めあう。

お互いの身体を慈しむように拭いあい、そしてベッドに倒れこんだ。

互いの心の絡まり合う感覚が、より一層の高まりを求め合う。

蒼の手が僕の身体を丁寧にたどる。その動きの一つ一つが愛情そのものだった。

「ここにいる間は僕だけを見て」

「分かったよ蒼。二人で忘れられない思い出を作ろう」

ゆっくりと丁寧に身体のぬくもりを確かめ合う。
迷いも戸惑いも、優しさの中で静かに溶けていった。

「夢見てた、こうなれること」

「僕もだよ。夢見てた、会った時から」

視線を絡ませながら身体の奥で感じる確かなつながり。
涙が出そうなほど胸が震えた。

——蒼と僕の熱が結ばれてゆく。

「……感じる……蒼のなか……すごく……あつい……」

「……わかる……湊が……僕の……なかに……」

熱い吐息と共にくぐもった声が混じり合う。

二人の身体は最深部で愛を確かめ合い、そして熱情がほとばしった。

「蒼……好きだよ……」

「湊……僕も……大好きだ……」

甘く深く溶けあい、焦がれるように互いの名を呼びあった。
やがて静寂が二人を包み込む。

窓の外では風に揺れる枝のざわめきが、誰も知らない秘密を抱きしめるように夜を覆っていた。

蒼はそっと湊の髪を梳き上げた。
星々のきらめきが湊の横顔を映し出す。

——僕だけのもの。

握った指先から伝わる体温が何よりも嬉しかった。
一緒にいられる間は絶対に離さない。その後は……考えたくない。

今はとても幸せだから——蒼は裸の胸にそっと顔をうずめた。

「いいから話せよ」の一言で湊は重い口を開いた。
蒼のことは弟分ということにして、これまでの出来事を厚いオブラートに包んで……

話を聞いているうちに、匠海にも少しだけ湊の気持ちが理解できた。
……そういうこともあるよな。

「湊、これやってみろ」

それは『初恋診断』という子供用のアプリだった。

「何かの参考になるかも……今のお前にはな」

* * *

帰り道。

「初恋診断」と書かれたアプリの画面に、子ども向けの質問が並ぶ。

指が勝手に動いた。

「他の人と話していると、気になる？」——はい。

「手を繋ぐと嬉しい？」——はい。

「助けたいと思ったことがある？」——はい。

他にいくつもあったけど……全部、はい。

笑っちゃうほどくだらない診断。

——でも、わかった。

子供用のお遊びアプリで、やっと自分の本心を認めることができた。

蒼、悪いけど諦めないよ——。

* * *

それは静かに雪の降り積もる夜だった。

ルクス前の広場。

コートの襟を立て、雪を踏みしめながら白い世界を歩いて行く。
その背中を追うように蒼が駆けて来た。

「どうしてグレインさんと付き合ってるの？」
息を荒げながら蒼が問いかけた。

「誰も気がつかなくても僕にはわかるよ」

「蒼とは関係ないよ」

「あの人、湊のこと特別な目で見てるの知ってるよね？
約束したよね、ここにいる間は僕以外と付き合わないって」

「付き合っていないよ。それに蒼とは関係ないって言ったろ」

「嘘だ、僕に関係ある。あれだけ約束したのに」
蒼の声が震えている。裏切られた気持ちでいっぱいだった。

「蒼、落ち着いて。蒼にも説明するよ、話せる時が来たら。だから……」

その言葉を遮って言った。
「散々話したじゃないか、ほっといてくれって」

「僕を信じて。待っててくれ」
蒼の手を取ろうとしたが、その手を振り払って……

「もういいよ」
蒼に胸を押された。

肌が赤く染まり、瞳が涙でにじみ、唇が嚙みしめられている。

それは自分の知らない“湊”。熱に縁取られた他人の顔。

——僕じゃない。思わず鏡から目をそらした。

グレインが再び耳元をなでるように囁いた。

「言っでごらん。誰を思いながら私に、こんなことを……日本の彼女か？それとも蒼か？」

そんなことまで……。言葉が出ない。

グレインが鏡越しに僕を見つめて言った。

「そうか！蒼なんだな。いいぞ！興奮する。ほら湊、思い切り叫んでみろ！」

背後からの動きが突然激しさを増した。

「ああっ……蒼っ……」

肉のぶつかる音が部屋にこだまし、ソファにしがみついた。

ただ息を乱し、突き上げられるたびに声が漏れる。

「……あおッ……あおッ……！」

高層の風が窓を撫で、薄いカーテンの影が床を渡っていく。

「ふふふ……いいぞ湊……だがな、どんなに想っても堕ちるのは私と一緒にだ……」

……………いやだッ！おまえなんかと！

「私と一緒に……堕ちろ……湊……！」

最後の一突きが深く激しく打ち落とされた。

「……あああ……ッ…！」

「おおッ……！」

2人は同時に声を上げて果てた。

倒れ込むようにしてグレインの上半身がのしかかる。

事が終わった後の静寂の中、
熱の残る背中を指先でなぞりながら、グレインが静かに囁いた。

「いい子だったな、お前は。まさに“破綻の美”を見せてもらったよ」

何も言葉を返さなかった。

無残な敗北を忘れるかのように、ひたすら余韻に浸っていた。

——グレイン、今だけはお前に譲る。

僕の心の片隅には、決して消えない炎がある。

勝負は始まったばかりだ——。

「それはありがたいです。助かります」

「いえいえ、湊さんには日頃お世話になってますし。
それにしても、スターのタマゴがたくさんいて目移りしちゃいますね。

新人さんのお披露目の場でもあるんですよ、この会は」

「そうなんですか。どうりで美男美女が多いと思いましたよ」

「ですよ。私、毎年この会来るの楽しみにしてるんです。

あっ！あそこに高嶺蒼がいます。私の推しなんです。可愛いと思いませんか？」

——蒼だ。

その瞬間、心に広がる動揺を必死に抑え込む。

「確かに可愛いですね」

——関係ない……自分の心に言い聞かせる。溢れそうな感情を氷で抑え込むように。

「あっ、そうだ！確か湊さんも『時の花嫁』観に行かれたと言っていましたよね？

もしかして、葉山綾乃のファンとか？」

「いえ。僕も小泉さんと同じ、蒼くんのファンです」

蒼以外の出演者のことは全く知らない。それで仕方なくそう答えた。

「あら、そうなんですか！嬉しいです。じゃあ特別に極秘情報、教えちゃいますね」

びっくりして聞き返した。

「えっ！いいんですか、僕なんかに」

「あはは！業界人ならみんな知ってる話ですけど……55企画って男性アイドルは弱いんですよ。

だから、蒼君にもちょっと場違いな仕事しか入ってこなくて」

「そうなんですか……」

「だからこそ、私たちファンは全力で応援しなきゃ、と思うんです」

小泉さんは結構本気だ。

「事務所、変わらないんでしょうか？何か複雑な事情でも？」

「どなたか偉い方のお気に入りになってるとか……だから簡単には動けないみたいですよ」

「でもこの間、交際発表されてましたよね、確か違う事務所では？」

「あれはただの話題作りだって話です」

「そうなんですか。とてもそんな風には見えませんでした」

胸の奥が痛んだ――話題作りか真実か、僕には確かめる術もない。

「ですよ。あっ！冴木社長がいらっしゃいました。ほら、皆集まってきた。私達も行きませんか？」

「いえ、僕はもう少しだけ資料を見てから……どうぞ、お先に」

蒼が老紳士の直ぐ後ろに従うのを見て躊躇した。

ニコニコしながら、恰幅のいい老紳士が歩いてくる。その後ろに姿のいい若い集団が付き従う。

老紳士が立ち止まると、そこに人だかりができ、名刺を差し出す人々の波が集中する。

後ろの若い集団にも、ちらほら人が集まってきている。

混雑の中、ただ一人だけが鮮明に浮かび上がる。

その隣で小泉さんが少し頬を赤らめ、しきりと何かを話しかけている。

蒼は穏やかに微笑みながら、静かに話を聞いていた。

小泉さんが僕に気づき手招きをした。

蒼がこちらに顔を向け、その視線が僕を捉えた。

※体験版はここまでです。

この続きは、ぜひ本編でお楽しみください。